阿弥陀寺遺跡

位置・経過

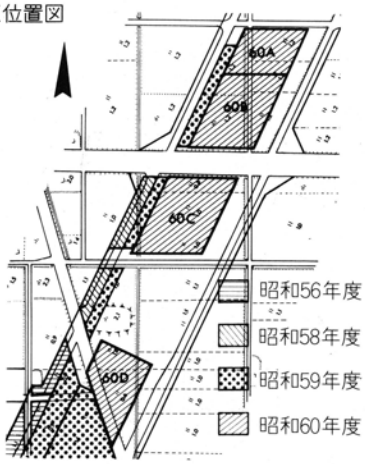
阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の一角、愛知県海部郡甚目寺町大字石作の字「阿弥陀寺」地内を中心とする一帯に所在する弥生時代～室町時代にかけての遺跡である。現在、遺跡の周辺は昭和19年の飛行場建設等により大きく改変をうけているが、微高地の展開を中心とする旧地形は下図の如くである。発掘調査は、昭和56年度より環状２号線建設に伴う事前調査として実施している。本年度は、58Ｄ・Ｅ、59Ｍ区の東側5,519㎡を対象とした。調査にあたっては先年度までの知見より、(1)弥生時代の環濠集落の外縁部の様相を明らかにすること、(2)鎌倉・室町時代の方格地割及び屋敷地の検出に主眼をおいた。調査の結果、(2)については概ね所期の目的を達成し、当該期の屋敷地、大型方形土壙等、新たな知見を得た。(1)については、調査区が環濠集落内に片寄りすぎたため充分とはいえず、来年度予定調査区においてより明確にされるものと考える。

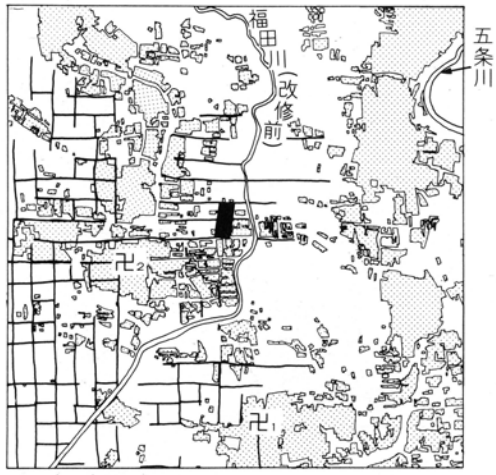
調査区の概要

各調査区の基本的層序はほぼ同一で、上より、Ⅰ：盛土、Ⅱ：耕土・床土、Ⅲ：旧耕土・床土（飛行場建設前）、Ⅳ：暗灰褐色土、Ⅴ：黒褐色粘質土・灰褐色粘質土の互層（ａ）及び砂質土（ｂ）である。遺構は、Ⅳ層の上面で鎌倉・室町期のものが、Vb の上面で弥生期のものが検出された。鎌倉・室町期の遺構は、各調査区にわたって検出されたが、弥生期のものは60Ｄ区に限られた。

以下、調査区を60Ａ・Ｂ区、60Ｃ区、60Ｄ区に分ち概要を記す。

調査区位置図

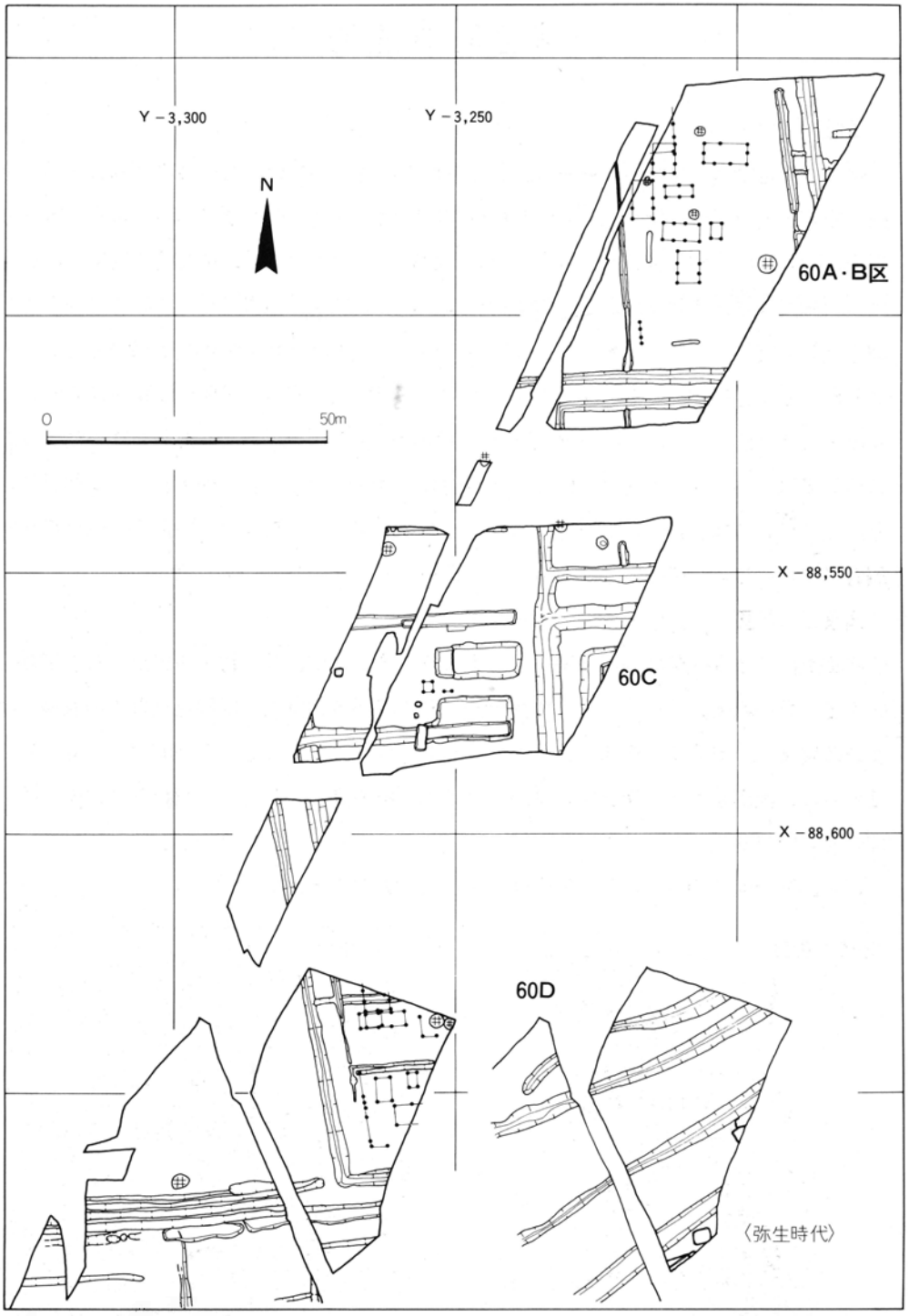




ﾛ条里制遺構（坪堺）
アミは微高地

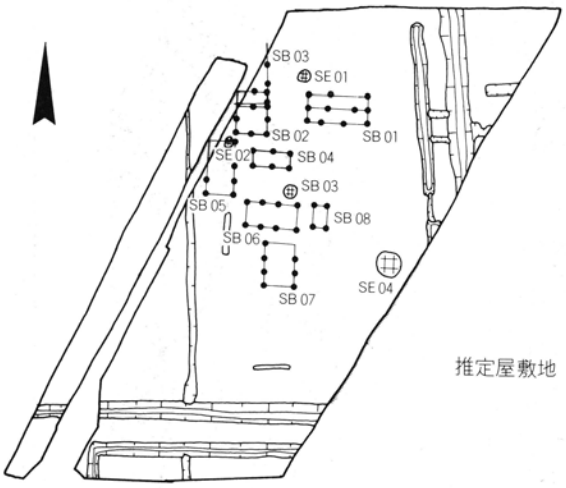
■　調査地
1　甚目寺
2　法性寺

遺跡周辺の微地形

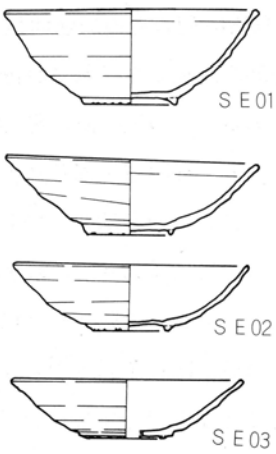


阿弥陀寺遺跡遺構配置図

〈60A・B区〉　本調査区では、東・南・西側が溝により画された東西約30m、南北約55m（推定）の方格の屋敷地が検出された。建物の棟方位、規模等については下表の通りで、棟方位をほぼ真北・東にとり、柱穴内に礎板を敷くという特徴がみられる。建物の配置についてみると、ＳＢ02の桁行の柱穴とＳＢ01の梁間の柱穴が対応し、ＳＢ02の西桁行柱列とＳＢ04の東桁行柱列とが同一直線上にあるという位置関係がみられ、少なくともこれらについては同時存在の可能性が考えられる。井戸は、大（ＳＥ01・03）・小（ＳＥ02・04）がみられ、出土遺物からすればＳＥ01・02が古く、ＳＥ03・04が新しい。この点は、前者が北側に位置し廃絶時に組物の最下段を残していたのに比し、後者が南側に位置し廃絶時に組物一切を抜取っていたという状況と対応している。屋敷地を画する溝についてみると、西側のものが小規模であるのに比し、東－南側は堅固であり平行する二条と溝となっており、それぞれの溝間の高まりは「道・通路」が想定される。なお、北側を画する施設については未確認である。以上、個々の遺構の時期区分についてはなお検討を要すが、総じて14～15世紀代に比定されるものであり、尾張平野における当該期の屋敷地の一様相について提示し得たものと考える。



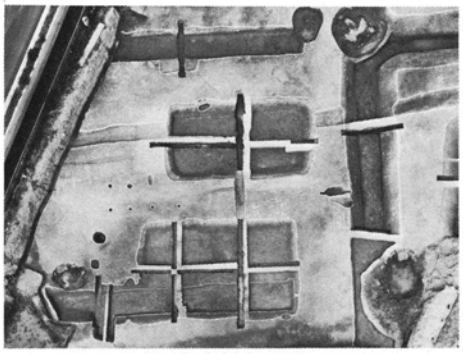
60A・B区　屋敷地　1：1000



出土遺物　1：4

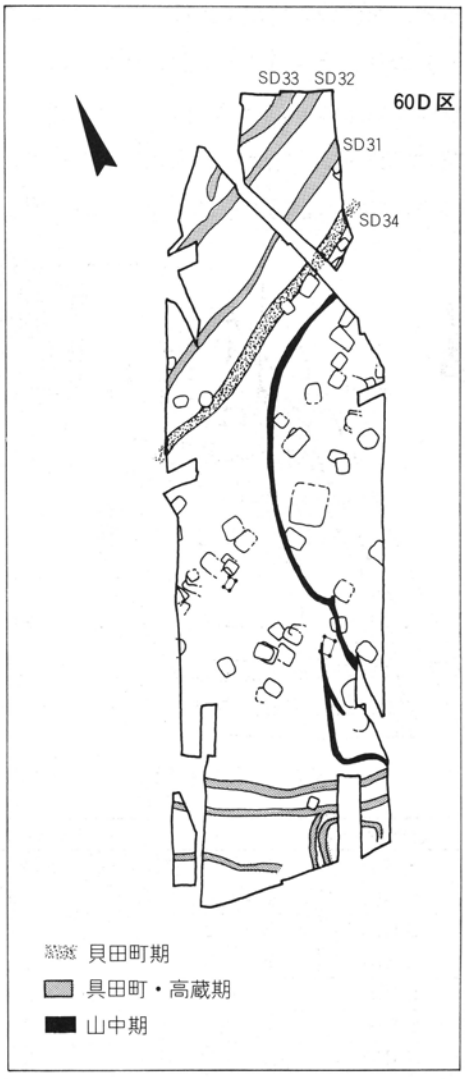
遺構番号	棟　方　位	桁行×梁行間数	桁行総長×梁行総長	備　　考
ＳＢ01	Ｅ－0.7°－Ｎ	(3)×2 間	803×401 cm	礎板
ＳＢ02	Ｎ－0.2°－Ｗ	3×2	582×396	礎板
ＳＢ03	Ｎ－7.2°－Ｎ	(2＋α)×(　　)	434＋α ×(　)	礎板
ＳＢ04	Ｅ－0.5°－Ｎ	2×1	487×212	礎板
ＳＢ05	Ｎ－0.3°－Ｅ	(3×1)	746×375	礎板
ＳＢ06	Ｅ－2.4°－Ｓ	3×1	659×342	礎板
ＳＢ07	Ｎ－0.9°－Ｗ	3×1	624×395	礎板
ＳＢ08	Ｎ－1.1°－Ｗ	1×1	304×192	礎板

〈60C区〉　検出遺構としては溝9条、掘立柱建物1棟、井戸1基、大型方形土壙3基、その他土壙等があり、これらは総じて14・15世紀代に比定されるものである。大型方形土壙は、従来県下では類例をみない規模のもので、東西約13m、南北約7m、深さ0.8mを計り、埋土は層位堆積をなしている。その性格については、なお検討を要すが、周辺より蔵骨器類が多量に出土しており、「墓域」の一施設ではないかとの印象を得ている。



大型方形土壙

〈60D区〉　検出遺構には、弥生時代のものと鎌倉・室町時代のもの（溝で画された屋敷地等）とがある。弥生時代の遺構は環濠集落の一角を構成するもので、溝4条、竪穴住居跡5軒等がみられた。溝4条のうちSD34は、貝田町期のもので断面「凵」形を呈す。既調査区の所見よりこれは環濠とはならないものである。SD31～33は環濠で、いずれも断面逆台形、貝田町・高蔵期の遺物を包含している。これらの溝はさらに北東に延び、環濠集落の規模は径300mを越えるものかと推察される。調査の課題とした環濠の外縁部の様相については、発掘区の殆んどが環濠内であったことから判然としない点もあるが次のように推察された。即ち、SD31～33の埋土上層は概ねVa層と一致する。このVa層は、Vb層とともに鎌倉・室町期の遺構の基盤層をなすが、層序としてはVb（古）→Va（新）である。これらの点より、環濠の外縁部は、当時、凹(Va)・凸(Vb)の低地となっていた状況が想定される。



環濠集落の変遷

（浅井和宏）